

本学小児歯科外来における問診表について

奥村 好久 山田 幸江
富沢 美恵子 野田 忠

新潟大学歯学部小児歯科学教室（主任：野田 忠教授）

（昭和59年10月29日受付）

A Report on the Preliminary Medical and Dental History in the
Pedodontics Clinic of Niigata University Dental Hospital

Yoshihisa OKUMURA, Yukie YAMADA, Mieko TOMIZAWA
and Tadashi NODA

Department of Pedodontics, School of Dentistry, Niigata University
(Chief: Prof. Tadashi Noda)

緒 言

本学小児歯科外来では、診療を開始した昭和54年9月1日より初診時に小児患者の保護者に問診表を手渡し、自筆で記入してもらっている。

初めて外来で相対する患児の、現在に至るまでの発育的变化および生活環境を問診表により短時間で知ることは、現症を迅速にかつ正確に把握する上で大きな助けとなり、開始される歯科治療と将来の口腔内疾患の予防、すなわち口腔領域の管理を行なう上で意義深いことと思われる。

小児歯科は近年一般歯科医の関心も高まり、以前に比べて小児も受け入れられつつあるが、まだ多くの患児が県内各地より大学病院に来院し、昭和59年8月には来院新患数が5,000名を越えた。そこで当教室では、保護者が問診表にどのように記入しているか、現行の問診表がどのような役割を果たしているか、問診表より本学小児歯科外来を受診する患児に特殊性が見いだせるかどうかなどを検討するため、問診表の調査を行なった。

調査資料および調査対象

調査資料は、初診時に保護者に手渡し治療室に入る前に自筆で記載してもらった問診表である（表1）。

調査対象は、昭和54年9月の小児歯科外来開始より昭和57年3月までに来院した男児1,500名、女児1,408名、計2,908名である。初診時年齢の分布（図1）では、3歳児、4歳児、5歳児で47.4%と全新患数の約半数を占めている。取り扱いが困難とされている2歳以下の新患数は17.7%であり、8歳以上の新患数は15.9%である。

年齢別の年度比較（図2）では、本学小児歯科が治療を開始した昭和54年度は4歳児がpeakをなしていたが、それ以降は各年度とも3歳児がpeakをなしている。

調 査 結 果

1. 保護者について

問診表の記載者（図3）は、母親が圧倒的に多く81.3%に及んでおり、ついで父親10.8%、その他2.0%、両親0.2%である。

保護者の職業（図4）は、サラリーマンが67.9%と最も多く、ついで自営業17.8%、農業5.2%、その他0.8%である。

両親の年齢分布（図5）では、父親は30～34歳39.2%、35～39歳30.0%、40～44歳12.8%、25～29歳11.4%であり、母親は30～34歳44.8%、25～29歳26.2%、35～39歳19.3%である。父親は30歳から39歳で、母親は25歳から34歳で各

表 1. 問 診 表

患者番号 _____

記載年月日 _____年 _____月 _____日

患者氏名 _____ 男・女 記載者 _____ 患者との関係: 父・母・ _____

愛 称 _____ 保護者の氏名 _____

生年月日 _____年 _____月 _____日 _____才 _____月 保護者の職業 _____

お父さんの年齢 _____才, お母さんの年齢 _____才

兄弟姉妹の年齢 男・女 _____才, 男・女 _____才, 男・女 _____才, 男・女 _____才

質問

1. 妊娠中の病気又は事故がありましたか? 有・無
疾患・事故 (_____) 妊娠 _____カ月 ~ _____カ月
2. お子さんが生まれたのは予定日より _____日 (早い・遅い)
3. 分べんは (正常・異常), 異常は _____)
4. 生れたときの体重は _____g, 生れたときの状態は (正常・仮死・ _____)
5. 赤ちゃんのころの哺乳は (母乳・人工乳・混合乳)
6. 離乳開始は _____カ月ごろ, 終了は _____カ月ごろ
7. 眠りながらの飲料摂取 (母乳・人工乳・乳酸飲料・ジュース・ _____)
は (12・15・18・21・24カ月・ _____) ごろまでやっていた
8. 初めての歯が生えたのは _____カ月ごろ, (上の歯・下の歯・わからない)
9. 今までに湿疹ができたことが (ある・ない), できたのは (赤ちゃんのときのみ・赤ちゃんの
ときから現在も・2才ごろから・ _____)
10. 予防注射は (全部受けた・全部または一部受けていない)
予防注射を受けなかった理由 (風邪だった・熱があった・アトピー又はアレルギー体質といわ
れた・予防注射で副作用がでたことがあるから・他の病気にかかっていた・ _____)
11. 今までに鼻水やセキがよく (でる・でない), 医者に (みせた・みせない)
医者に何といわれましたか (風邪・気管支炎・ゼンソク・ _____)
12. ゼンソクといわれたことが (ある・ない)
13. 薬で副作用がでたことが (ある・ない), 副作用 (_____)
14. 家族にアレルギー性疾患が (ある・ない), 疾患 (_____)
15. 今までにかかった病気は (はしか _____才・おたふくかぜ _____才・みずぼうそう _____才・
特発性発疹 _____才・けいれん _____才・その他 _____, _____才)
16. 今までに入院したことが (ある・ない), 病名 (_____, _____才・現在入院中)
17. 現在服用中のくすりが (ある・ない)
18. 今までに抜歯や怪我で血が止まりにくかったことが (ある・ない)
19. お子さんの性格 (神経質・のんびりしている・人見知りする・恐怖心が強い・ふつう)
20. 癖が (ある・ない), (指しゃぶり・爪かみ・ _____)

々の約70%を占めている。

2. 兄弟姉妹について

兄弟姉妹 (図6) は, 1人っ子が10%, 2人兄弟58%, 3人兄弟21%で, 2人兄弟, 3人兄弟が多数を占めている。2人兄弟の内わけでは, 1番目が28%, 2番目が30%と上の子と下の子の差はあまりなかったが, 3人兄弟においては, 1番目5%, 2番目6.7%, 3番目9.5%と下の子ほど当小児歯科外来で治療を受ける機会が多くなって

いることが判った。

3. 妊娠・出産の経過

母親の妊娠中の健康状態 (表2) は, 良好93.3%, 不良6.7%である。ここに言う不良とは, 妊娠中毒症, 切迫流産, 貧血などである。出産状態 (表3) は, 正常84.9%, 異常15.1%である。なお今回, 分娩状態と生まれた時の新生児の状態を総括する意味で出産状態という言葉を使った。分娩の異常としては, 帝王切開, 逆子, 吸引分娩,

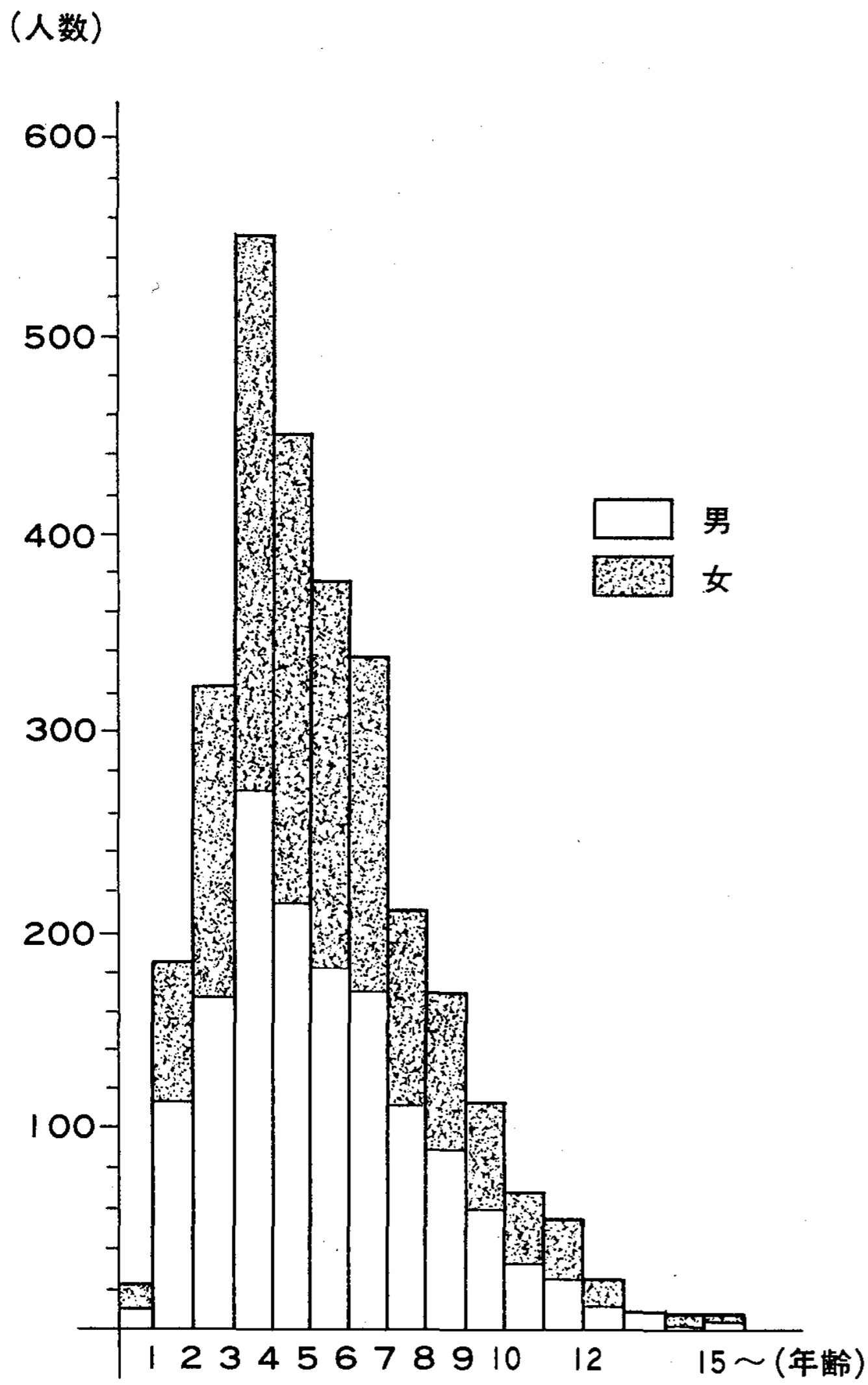


図 1. 年齢別調査対象数

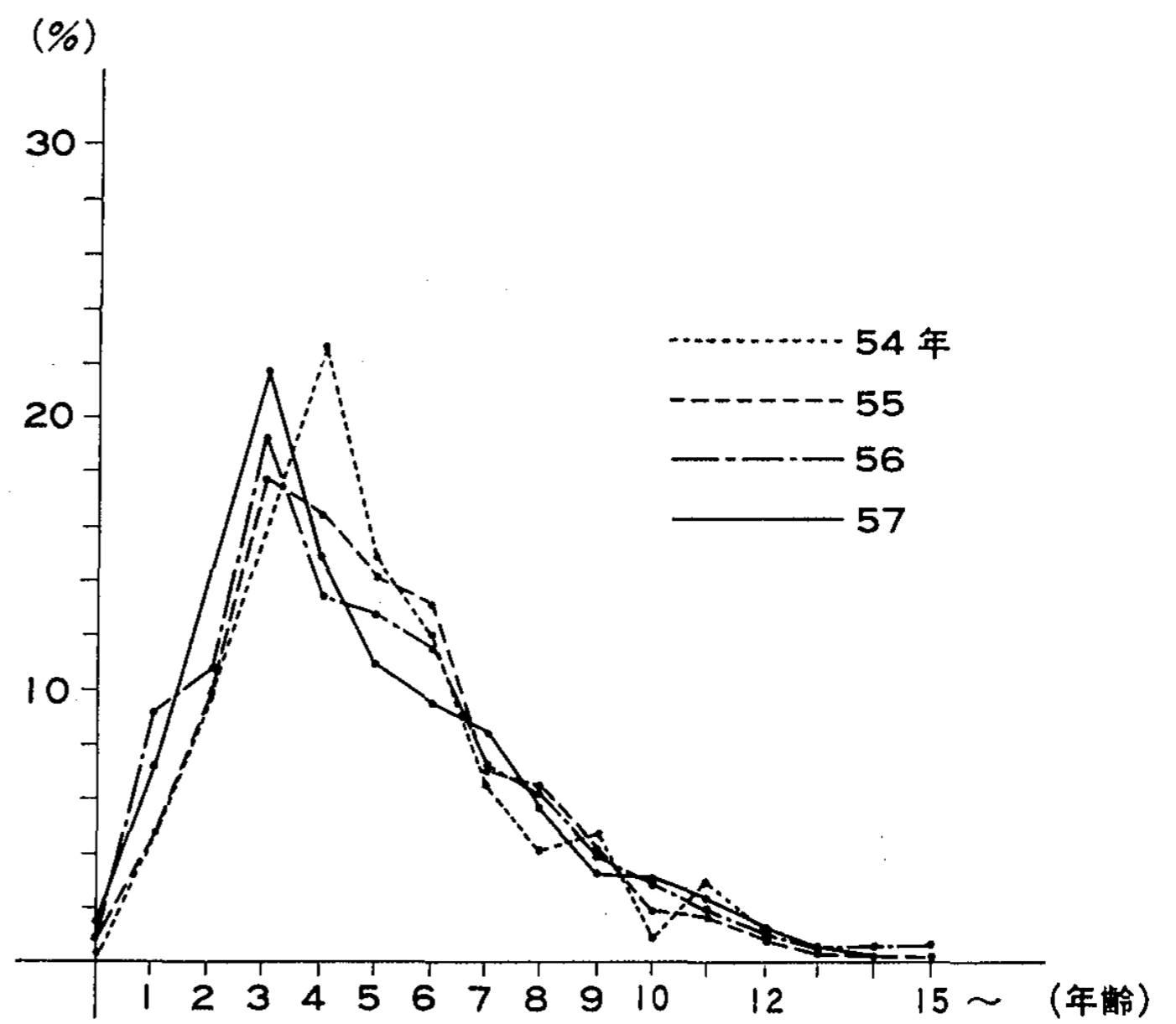


図 2. 年齢別年度比較

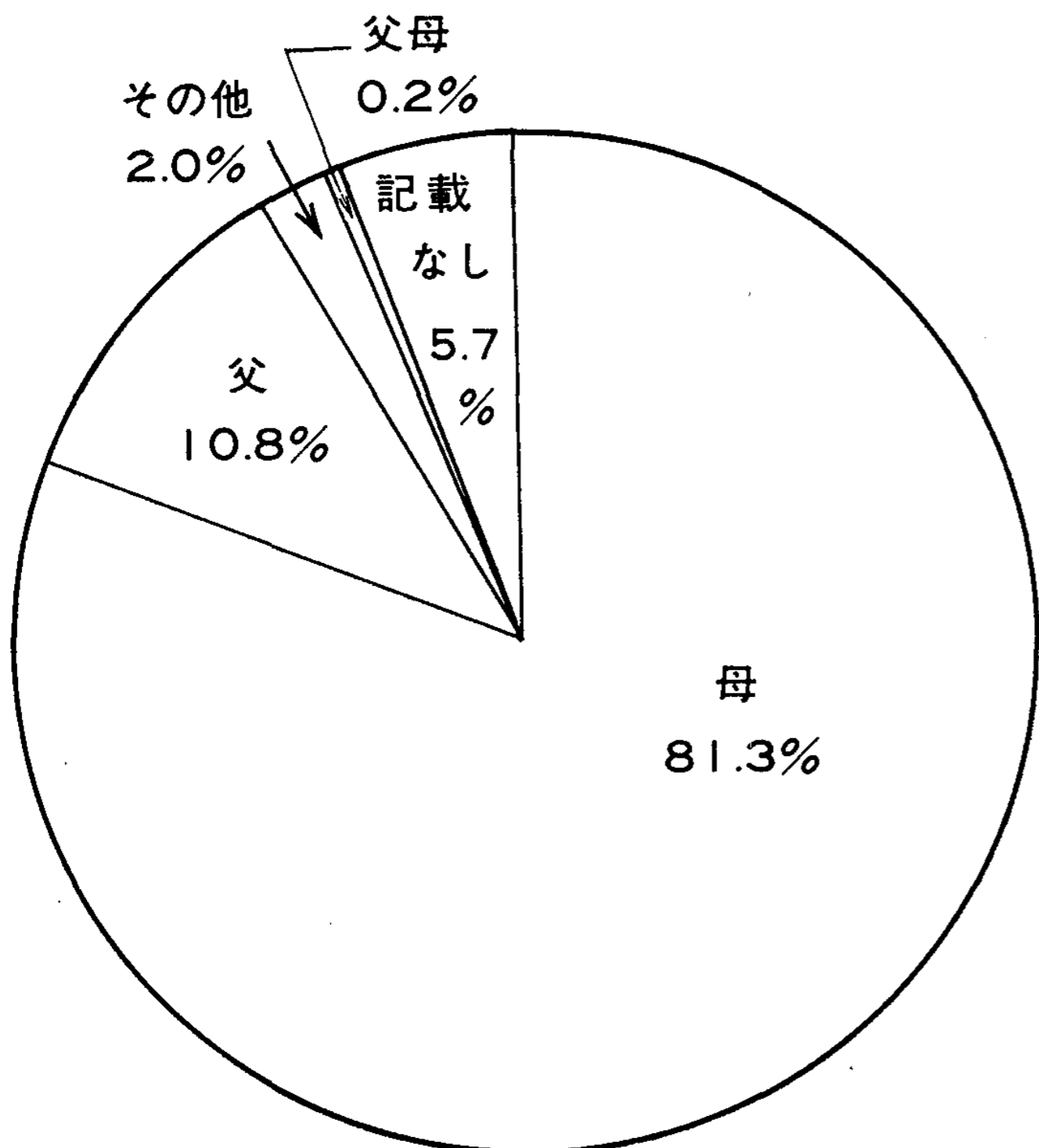


図 3. 記載者

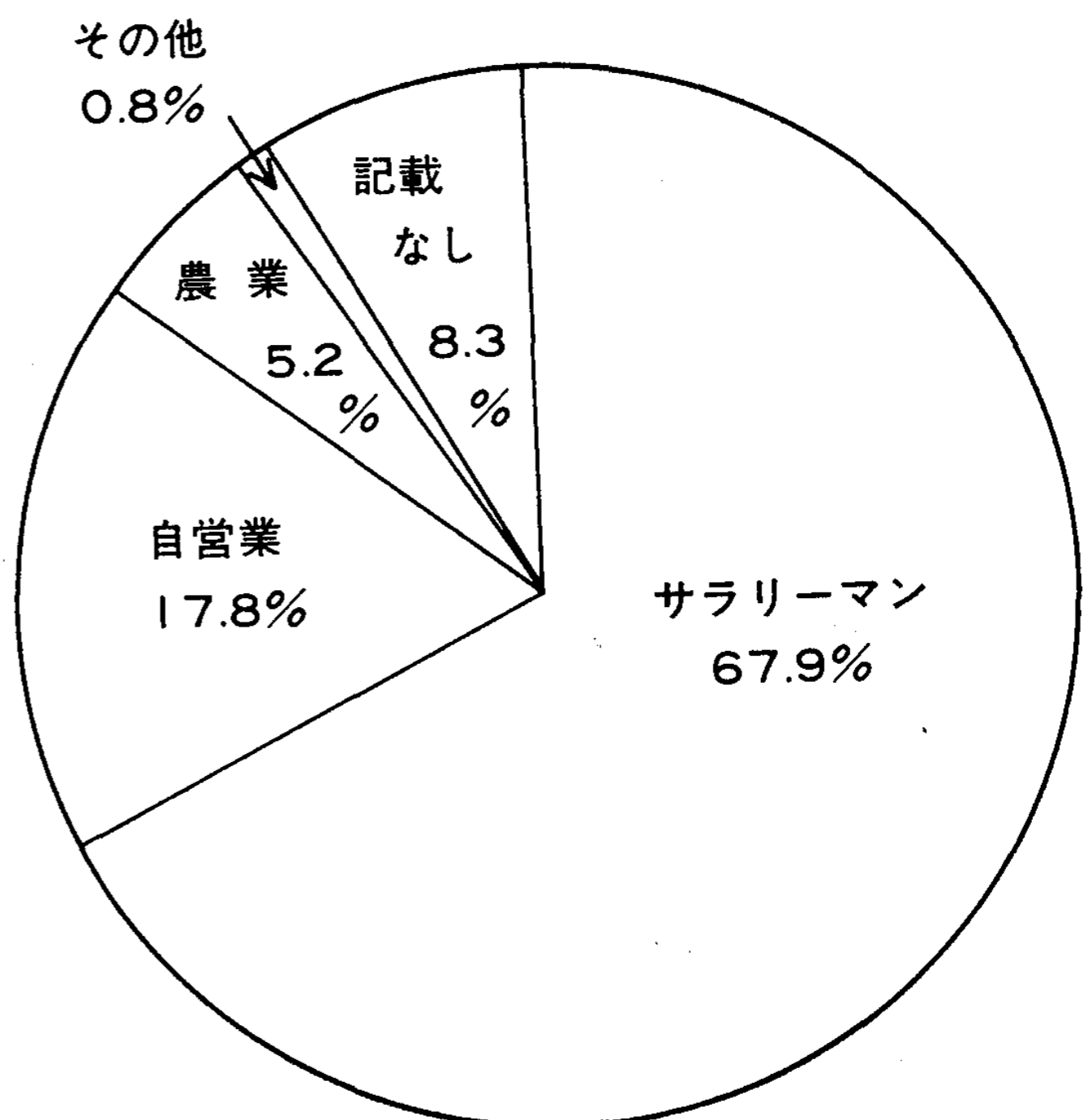


図 4. 保護者の職業

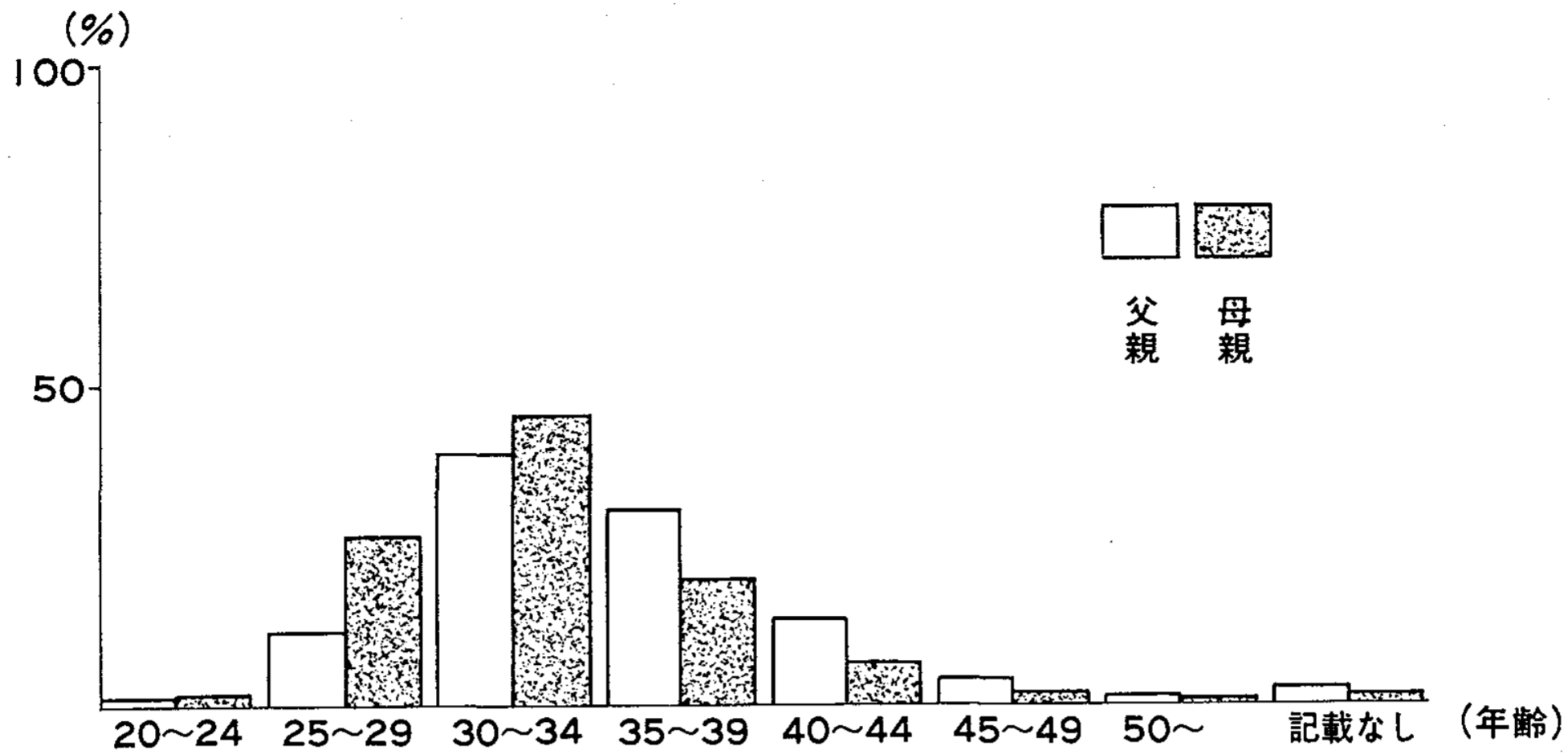


図 5. 父親, 母親の年齢分布

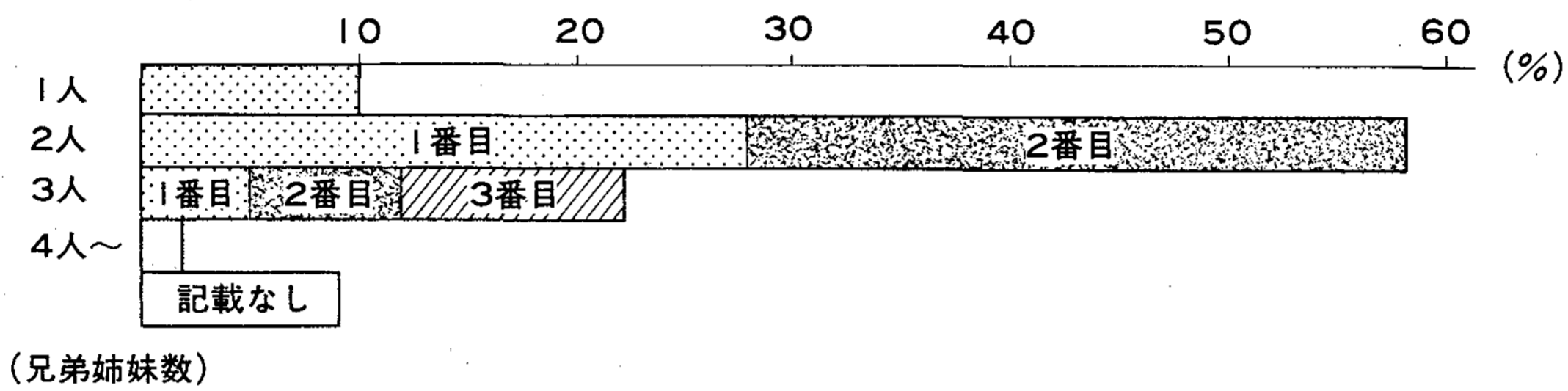


図 6. 兄弟姉妹

表 2. 母親の妊娠中の健康状態

良	好	2,690例	93.3%
不	良	193	6.7
合	計	2,883	

表 4. 哺乳の状態

母	乳	652例	22.2%
人	工	1,110	37.7
混	合	1,181	40.1
合	計	2,943	

表 3. 出産状態

正	常	2,418例	84.9%
異	常	431	15.1
合	計	2,849	

表 5. 離乳開始時期

0~3か月	166例	9.0%
4~6か月	1,257	68.4
7~9か月	251	13.7
10~12か月	104	5.7
12か月~	58	3.2
合	計	1,836

鉗子分娩などがあり、生まれたときの新生児の状態の異常としては、未熟児（在胎 37 週以前）、過期産児（在胎 42 週以後）、低出生体重児（2,500 g 以下）、高出生体重児（4,000 g 以上）などがある。

4. 栄養法について

哺乳の状態（表 4）は、母乳 22.2%、人工乳 37.7%、混合乳 40.1%である。混合乳の者を含め全体の 62.3%は母乳をやっており、一方、混合乳の者を含め 77.8%は人工栄養法を利用していた。

離乳開始時期（表 5）は、生後 4 か月頃あるいは体重が 7 kg を越えたときが適当とされており¹⁾、本結果でも 4~6 か月が 68.4% と最も多数であった。

離乳終了、すなわち實際上、主たる栄養源が乳汁以外の半固形ないし固形食となった時期（表 6）については通常 11 か月から 12 か月頃¹⁾とされ

表 6. 離乳終了時期

0～6か月	15例	0.8%
7～12か月	1,160	65.9
13～18か月	457	25.9
19～24か月	112	6.4
25か月～	17	1.0
合計	1,761	

表 7. 眠るときの飲料摂取

母乳	755例	33.6%
人工乳	1,233	54.9
乳酸飲料水	62	2.8
ジュース	108	4.8
牛乳	43	1.9
その他	13	0.6
行なわず	32	1.4
合計	2,246	

ており、本調査でも7～12か月が65.9%と最も多数であり、特に12か月目に45%が集中していた。

離乳開始時期、離乳終了時期とも、「不明」および「記載なし」の時期の不明確なものが全体の約4割もあった。

眠るときの飲料摂取（表7）を行わなかった小児はわずか1.4%であり、ほとんどの小児が眠るときの飲料摂取を行っていた。眠るときに飲料摂取を行なったとは、母乳、人工乳、乳酸飲料水などを寝る間際、寝ながら、または夜中に飲ませていたり、飲ませた時期があったということの意味している。飲料の品目（表7）は、人工乳54.9%、母乳33.6%とこの2品目でほぼ9割近くを占めており、ジュース、乳酸飲料水、牛乳などはわずかであった。

眠るときの飲料摂取期間（表8）では、0～6か月が11.9%、7～12か月が34.7%、13～18か月が27.6%、19～24か月が5.3%であり、2歳以降が18.7%もあった。

5. 生歯時期について

最初の乳歯の萌出（表9）についての調査では、下顎の歯が先に萌出してきた小児80.9%、上

表 8. 飲料摂取期間

0～6か月	208例	11.9%
7～12か月	608	34.7
13～18か月	483	27.6
19～24か月	93	5.3
25か月～	327	18.7
行なわず	32	1.8
合計	1,751	

表 9. 乳歯の萌出

上の歯が先	360例	19.1%
下の歯が先	1,527	80.9
上下同時	1	
合計	1,888	

表 10. 乳歯の萌出月齢

0～6か月	1,049例	48.3%
7～12か月	1,094	50.3
13か月～	30	1.4
合計	2,173	

表 11. 問診表によるアレルギーの有無

有	91例	3.2%
無	2,710	96.8
合計	2,801	

顎の歯が先に萌出してきた小児19.1%であった。

初めて乳歯が萌出した月齢（表10）についての調査では、6か月以内に48.3%の小児が歯を有するようになり、12か月たっても歯が萌出していない小児は1.4%であった。

7. 問診表によるアレルギー・出血傾向の有無

アレルギーに関して（表11）は、91名、3.2%がアレルギー疾患の既往歴や家族歴よりアレルギー体質と判断される記載をしており、今回、便宜的にアレルギー「有り」とした。問診表によりアレルギー「有り」と判断された患児のうち、詳しい問診により新患係がテストの必要がないと判断したケース、アレルギー疾患の担当医がすでにお

表 12. 問診表による出血傾向の有無

有	25例	0.9%
無	2,738	99.1
合 計	2,763	

表 13. 性 格

神 経 質	623例	19.1%
の ん び り	288	8.8
人 見 知 り	387	11.9
恐 怖 心	746	22.9
ふ つ う	1,214	37.3
合 計	3,258	

表 14. 習癖の有無

有	668例	25.0%
無	2,005	75.0
合 計	2,673	

表 15. 習癖の種類

指しゃぶり	325例	43.3%
つめかみ	158	21.1
そ の 他	138	18.4
記 載 な し	129	17.2
合 計	750	

り担当医の指示に従ったケースなどを除き 50 名の皮内テストを本学小児歯科外来で行なったが、検査結果が陽性の者はいなかった。

出血傾向 (表 12) に関しては、問診表では 25 名、0.9% が「有り」と記載していた。問診表において出血傾向「有り」の患児は、血液疾患についてすでに担当医がおり、担当医と密接な連携を取り、担当医の指示に従って処置および投薬を行なったケースを除き、検査室、医学部小児科に検査を依頼した。

8. 患児の性格について

患児の性格 (表 13) は、普通 37.3%、恐怖心 22.9%、神経質 19.1%、人見知り 11.9%、のんびり 8.8%であった。

9. 習癖の有無と種類

習癖の有無 (表 14) に関しては、「有り」が 25.0%、「無し」が 75.0%で、習癖の種類 (表 15) は、指しゃぶり 43.3%、つめかみ 21.1%、その他 18.4%、具体的な記載なし 17.2%であった。

考 察

問診は診療にあたって、特に注意すべき事項をあらかじめチェックするためのアンテナの役目をする。小児歯科では次の 4 項目について主として調査している。

- ① 全身の状態について
- ② 口腔の状態について
- ③ 小児の取扱いについて
- ④ 齲蝕予防について

問診表はこれらの項目を含んで、小児の全体像を表現するように組んでいる。この小児歯科の問診表から判ったことについて、他大学小児歯科の報告との比較をまじえて、以下に考察する。

初診時年齢は 3 歳児が最も多数であり、年度別に見てもそう変化がなく、低年齢層の来院数が増えているというような傾向は特にみられない。

記載者が誰であるかを知ることが、問診表の信頼度を計る一つの指標になると思われる。また再度詳しく問診する際に必要である。本調査では父親の記載が 10.8%もあり、記載者イコール付き添い人ではないが少なくとも 10.8%の父親が付き添って来院してきており、平日の午前 9 時から午後 3 時までの受付時間を考慮にいれるときかなり高い割合と言える。

保護者の年齢、職業などを知ることが、経済力、治療に対する理解度などの参考になると思われる。両親の年齢分布では、父親では 30 歳から 39 歳で、母親では 25 歳から 34 歳で各々の約 70%を占めており、大阪大学小児歯科での鈴木らの報告²⁾の父親平均年齢 34.1 歳、母親平均年齢 30.5 歳と大差がないと思われる。

兄弟姉妹については、2 人兄弟 58%、3 人兄弟 21%と 2 人兄弟、3 人兄弟が多数であった。鈴木ら²⁾は、1 人っ子 23.2%、2 人兄弟 65.4%、3 人

兄弟9.6%, 4人兄弟1.3%であり, 2人兄弟が過半数を超えているのは共通しているが, 本学は鈴木²⁾らに比較して1人っ子が少なく3人兄弟が多い傾向にある。

母親の妊娠中の健康状態で「不良」と答えたのは6.6%であり, 真柳ら³⁾の9.9%, 北島ら⁴⁾の7%と同様の傾向がみられ, 妊娠中の病気または事故の既往はおおよそ10%以下であることがわかった。ところで, 妊娠中の母体の健康状態あるいは出産状態のような乳歯形成期の環境的条件と乳歯の石灰化さらには乳歯齲蝕との関係について, 歯科的に明確な結論が出ているとはいえない³⁾。

哺乳の状態は, 母乳22.2%, 人工乳37.7%, 混合乳40.1%である。母乳は諸資料によると, 昭和34年から昭和46年にかけて56.1%から32.7%に漸次減少してきており⁵⁾, 昭和49, 50年北島ら⁴⁾19%, 昭和50年原ら⁶⁾28.3%, 昭和52年真柳ら²⁾16.1%と最近10年は15~30%と低率を示している。近年, 小児科領域で母乳栄養の価値が再認識されているにもかかわらず, 本調査でも22.2%の低率であった。岩井ら⁵⁾は, 我が国における母乳栄養減少の理由として, 人工粉乳が改良され一般の人々に不安なく受け入れられるようになったこと, 母乳栄養確立への努力の欠如や職業を持つ母親の増加したことなどを挙げている。

離乳開始時期は, 生後4か月頃あるいは体重が7kgを越えたときが適当とされており¹⁾, 本調査でも4~6か月が68.4%と最も多く, 真柳ら³⁾の調査でも大半が4~6か月時に離乳を開始していた。岩井ら⁵⁾は, 形のあるものを離乳食として与え始めるのは4か月の初めから5か月の中頃が平均パターンであるとし, その理由として, 現在では乳児の成長が良いため離乳開始が生後4か月の初めからと早くなっていると考察している。

兼坂⁷⁾は, 平均離乳開始時期は無齲蝕児が4.6か月, 重症齲蝕児で6.1か月と無齲蝕児の方が離乳開始時期の早い傾向を指摘しており, 本報告では離乳開始が7か月以上である小児が22.6%にも達し, 歯科学的に問題がある。

離乳終了は, 通常11から12か月頃¹⁾とされており, 本報告でも7~12か月が65.9%と最も多数

であり, 特に12か月目に45%が集中していた。

兼坂⁷⁾は, 無齲蝕児の平均離乳完了の時期は11.1か月, 重症齲蝕児は14.4か月であり, また無齲蝕児では83.7%とほとんどが12か月以前に離乳を完了していたのに比較して, 重症齲蝕児では12か月以前に離乳を完了したものは43.6%と半数にも満たず, 12か月以降が56.4%と多かったと記載している。本報告では, 12か月以前に離乳を完了したものは66.7%で, 12か月以降が33.3%であり, やはり離乳終了の遅いことが齲蝕にかかわっていることが指摘される。

鈴木ら⁸⁾は, 就寝時の哺乳が早い時期における齲蝕に大きな影響を持ち, また早い時期の齲蝕は上顎切歯唇面に現われ, 月齢の増加とともに齲蝕が多歯面および多歯種に及んでいくと指摘している。

本学小児歯科外来に来院した患児のうち, 眠るときに飲料摂取を行なわなかったのはわずか1.4%であり, 小林ら⁹⁾は, 本学小児歯科外来を訪れる小児は, 上顎前歯部において, 低年齢から抜歯および歯髄処置など高度な歯科的治療を必要とするものが多いことを指摘しており, 就寝時の哺乳が早い時期における齲蝕に大きな影響をもつことがうかがえる。

眠るときの飲料摂取の期間では, 半数以上が生後13か月間以上の長期に及んでおり, また生後25か月間以上も約5人に1人は欲しがるままに眠るときの飲料摂取を受けていたことになる。野田¹⁰⁾は, 適切な時期に眠る際の哺乳を中止することが必要で, やむをえず夜間に哺乳しなければならない場合には, 哺乳後, 脱脂綿などで歯をふいたり, 少量の湯ぎましを最後に飲ませるなどの配慮が必要であると指摘している。

初めて乳歯が萌出した月齢が13か月以上であった小児は, 1.4%である。北島ら⁴⁾の報告でも初めての乳歯が萌出するのに13か月以上かかった小児は, 昭和41, 42年1%, 昭和49, 50年2%とわずかであった。岩井ら⁵⁾の報告では, 生後6か月で歯が萌出していない者は40.3%であり, 生後12か月には99.6%の者が歯を有していた。乳歯の萌出月齢を記載してもらうことにより, 萌出

時期の傾向を知るとともに、どの程度の保護者が子供の口腔内に関心を持っており、どの程度の知識を持っているかがうかがえる。

アレルギー、出血傾向は、治療にさいして十分注意を払うべき必要のある問題であり、比較的容易にテストを行なうことができるので、問診表にて少しでも疑いのある場合にはこれらの検査を確実に行ない、事故が発生しないよう対処しなければならない。

薬疹、薬の常用、出血性素因など体質的に十分注意を払う必要のあると思われる患児の割合は、真柳ら³⁾、北島ら⁴⁾とも合計して20%と報告しているが、本調査ではアレルギー、出血傾向のみに限られているが、それよりかなり低い値であった。

保護者による小児の性格の判断は、必ずしも客観的で的確であるとは言い難いが、保護者がその小児をどうみているかなど治療にさいして子供を取り扱う一つの参考にはなると思われる。

習癖を持つ小児の割合について、黒須¹¹⁾は48%、神山ら¹²⁾は45.7%、北島ら⁴⁾は47%と報告しているが、本調査では25.0%とかなり低い結果であった。口腔領域の習癖を客観的に判断することは困難であり、保護者が小児の習癖を認識していない場合も考えられる。

結 論

昭和54年9月の本学小児歯科外来開始より昭和57年3月までに来院した男児1,500名、女児1,408名、計2,908名の問診表を調査した結果、本学小児歯科外来の来院患者について、次のような傾向がみられた。今後これらの調査結果を生かし、小児の診療を行なってゆく予定である。

- 1) 本学小児歯科外来初診時の年齢分布では、3歳児が最も多い。
- 2) 記載者は、母親が81.3%であるが、父親も10%を超えていた。
- 3) 保護者の職業は、サラリーマンが68%と最も多く、ついで自営業、農業であった。
- 4) 両親の年齢分布では30歳から34歳が最も多数であり、兄弟姉妹については2人兄弟、ついで3人兄弟が多かった。

- 5) 母親の妊娠中の健康状態で不良は6.7%であり、出産状態で異常は15.1%であった。
- 6) 哺乳の状態は、母乳22.2%、人工乳37.7%、混合乳40.1%であった。
- 7) 離乳開始時期は4~6か月が68.4%と最も多く、離乳終了時期は7~12か月が65.9%と最も多数であった。
- 8) 眠るときに飲料摂取を行っていた小児は98.6%にも及び、飲料の品目は人工乳、母乳で大半を占めていた。

眠るときの飲料摂取の期間では、半数以上が生後13か月以上の長期に及んでいた。

- 9) 最初の乳歯の萌出で、下顎の歯が先に萌出してきた小児と上顎の歯が先に萌出してきた小児の割合は、おおよそ4:1であった。

初めて乳歯が萌出した月齢の調査より、1年以内に歯を有するようになる者は98.6%であることがわかった。

- 10) アレルギーに関して、問診表には91名、3.2%がアレルギー体質と判断される記載をしており、そのうち50名の皮内テストを小児歯科外来で行なったが、検査結果が陽性の者はいなかった。

出血傾向に関して、問診表では25名、0.9%が出血傾向があると記載していた。

- 11) 患児の性格は、普通37%、恐怖心23%、神経質19%、人見知り12%、のんびり9%であった。

- 12) 習癖を持つ小児の割合は、25%とかなり低い値であった。習癖の内容としては、指しゃぶり、つめかみなどが目立った。

文 献

- 1) 中山健太郎編：小児科学，81頁，文光堂，東京，1969.
- 2) 鈴木俊行ほか：小児患者の来院理由とその背景．小児歯誌，12；53-56，1974.
- 3) 真柳秀昭ほか：外来患者の実態調査(1)来院前ならびに来院時の生活環境および口腔内環境について．小児歯誌，15；331-341，1977.

- 4) 北島正子ほか: 初診時における小児ならびに保護者の実態調査—8年前との比較—. 愛院大歯誌, **13**; 399-409, 1976.
- 5) 岩井俊子ほか: 乳幼児の食生活とう蝕に関する疫学的研究(1)—乳児の食生活の実態について—. 小児歯誌, **15**; 122-132, 1977.
- 6) 原 秀一ほか: 本学小児歯科診療室における外来患者の実態調査(第3報)口腔習癖について. 歯学, **63**; 342-348, 1975.
- 7) 兼坂博之: 乳幼児期における栄養摂取状態からみた小児齲蝕について. 小児歯誌, **15**; 198-204, 1977.
- 8) 鈴木康生ほか: 低年齢児の食物摂取と齲蝕との関連について. 小児歯誌, **14**; 308-314, 1976.
- 9) 小林秀樹ほか: 処置内容から見た乳歯齲蝕の罹患状態について. 小児歯誌, **21**; 147-151, 1983.
- 10) 野田 忠: 子どものむし歯—子ども時代にきまる健康な歯—. 120頁, グロビュー社, 東京, 1981.
- 11) 黒須一夫: 現代小児歯科学—基礎と臨床—. 425-432頁, 医歯薬出版, 東京, 1974.
- 12) 神山紀久男ほか: 保育園児の Oral Habit に関する調査 第一報 Oral Habit の発生について. 小児歯誌, **13**; 36-41, 1975.